

# 西洋、中国、日本のジフテリア史素描

## その二 近世

中村 昭

本稿のその一で古代・中世の分を記述した。それは既に本誌四十一巻三号に掲載されている。今回は近世であるが、十六世紀から十九世紀初期までを近世とし、このうち十六世紀と十七世紀を近世前期、十八世紀から十九世紀初期までを近世後期とし、それを西洋、中国、日本に分けて記述する。

### (一) 西洋近世前期

へーゼル Heinrich Haeser<sup>(1)</sup>によれば、この病気は古くから Angina gangraenosa maligna, Garotillo (スペイン語、絞首の意)、Brandbräune, Schlundpest (ドイツ語、のどの疫病)等の名前で知られ、記録されていた。十六世紀の早い記録では、一五一三年、一五一四年に家畜の間で流行し、一五一八年にはオランダで Schlundbräune として流行が記録されている。ジフテリアという病名は十九世紀にブレトノー Pierre Bretonneau によって創出されるまでないのであるが、以下便宜上使用ことがある。

またジャコビ A. Jacobi<sup>(2)</sup>によれば、一五五七年にオランダで流行し、一五六三年にはナポリとシシリー島で流行し、

これは翌年にはコンスタンチノープルにまで伝わった。また一五六五年にはダンチツヒ、ケルン、アウグスブルクに流行した。

一五七六年にはパリで流行し、秀れた臨床医であつた Bailou はこの時に診た症例の臨床観察と剖検記録を次のように残している。<sup>(3)</sup>

患者は呼吸困難が著名である。呼吸は死に至るまで速く且つ浅い。患者はまるで呼吸によつて乾上るようだ。咳も痰も出ない。彼等は一瞬たりとも呼吸を止めることができない。彼等はしばしば体を直立させて小刻みに呼吸する。熱は高くなく、高熱がそういう呼吸をさせるのではない。

外科医はこの原因不明の呼吸困難の一男子の屍体解剖をした。粘稠な抵抗のある偽膜が気管をおおっていることがわかつた。これによつて窒息して急死したのである。

これは喉頭ジフテリアの特徴である。正確に言えば病変は喉頭にだけあるのではなく、この記述にあるように気管の深部にまで病変が及んでいるのである。だからラテン語の病名 *Synanche trachealis* ともいわれる。体を直立させて呼吸するのはこの病気の特徴で、そうすることによつて气道が真直になつていくらか呼吸がしやすくなるからである。

スペインでもこの病気は間断なく流行し、一五八三年、一五八七年、一五九一年、一五九六年、一六〇〇—一六〇五年、一六一三年等の流行が記録されている。ヘレルラ Hererra は一六一五年に皮膚と創傷のジフテリアを認め、また剖検によつて偽膜をこの病気の特徴とした。<sup>(4)</sup>

イタリアでも十七世紀において流行の記録は多い。ヘーゼル Haeser<sup>(5)</sup>によれば、一六一八年にはナポリで乾いた暑い氣候の為にこの病気が異常に多く、一六二〇年にはシシリ島で流行し、以後中断はあつたが、一六五〇年頃までにこの疫病の為に約六万人の小児、成人が死亡したと推定されている。この間セヴェリノ M. A. Severino は一六四二年の剖検記録で偽膜の存在を記録している。彼はまたこの病気の為にしばしば喉頭切開をしたといわれる。

イギリスでも malignant quinsies, cyanache trachealis, throat ail 等の病名で、一六五九年、一六七三年、一六八六年、一六八九年等に流行の記録がある。<sup>(6)</sup>

アメリカ(ニューイングランド)でも十七世紀からこの病気の記録が散見される。ジョスリン John Josselyn は一六三八年、一六六三年のニューイングランドの航海記で「この地方の人は悪性のどの病気 (throat distemper) に悩まされており、それは短期間で致命的になることがある。」と書いている。またマザー Cotton Mather によれば「一六九五年の十二月にクループ(喉頭ジフテリア)がニューイングランドに侵入し、多くの子供の命を奪った。ダンフォース Samuel Danforth 牧師は第一子を既にこの病気で失っていたが、この時にまた三人の子供をこの病気によって奪われた。」ということである。<sup>(8)</sup>

## (二) 西洋近世後期

かつてはこの病気はどの地方でも保菌者によって温存され、消失するものではなく、目立たない流行をくり返しながら、時々いろいろな要因によって大流行したのである。

アメリカ、ニューイングランドでは一七三五年から翌年にかけて大流行した。この時は猩紅熱と同時に流行した可能性があり、二つの病気はいずれも咽頭炎を伴うので紛らわしい面があった。この流行の後でボストンの医師ダグラス H. W. Douglas は“The Practical History of a new epidemical Eruptive Military Fever with an Angina Ulcusculosa” という記録を残した。<sup>(9)</sup> 彼が住んでいたボストン地方では猩紅熱が主体だったので、そちらに重点をおいた書き方になっているが、大体の記録は二つの病気を一つの疾病のように記述しているのである。当時の医学の水準ではやむを得ないことだったかも知れない。

この時の流行の最初は一七三五年三月二〇日にボストンから五〇マイル東のキングストンで一人の子供が発病三日目

で死んだことである。次にそこから四マイル離れたある家族で三人の子供が皆発病三日目に死んだ。それから徐々に広がり、初めの四〇人の患者は一人も助からなかった。いずれものどや首や気管が侵され、首の周囲は胸骨まで腫脹し、絞首されるように死んだ。<sup>(10)</sup>

それから他の町へ広がった時には病勢はややおさまっており、八月、九月にボストンに到達した時には猩紅熱のような発疹を伴うものもあつた。一七三六年二月の *New York Gazette* (新聞) はこの病気について次のように述べている。<sup>(11)</sup>

今まで痘瘡以外にはこの病気程人々を恐怖に陥し入れたものはなかった。しかもその病名はまだ不明である。それは若い人や子供の間に流行し、非常に死亡率が高い。遺憾ながら医師達はその病気の本態を知らないばかりでなく、相も変らぬ治療法でこれらの患者を殺している。(その頃の治療法の中心は瀉血であつた) 患者は最初の一―二日は元気がなく、続いてのどの痛みを訴え、口蓋垂や周辺の粘膜は腫れ、膿がついている。これがこの病気の特徴である。さらに一―二日すると咳が出て来て体温が上り、呼吸が粗くなり、声が出なくなり、息を引き取る。

これは猩紅熱ではなくジフテリアであらう。この頃のアメリカはまだ正式な教育を受けた医師が少なく、牧師が患者を診ることも多かったが、そういう牧師の一人である *Dei Kinson* はこの病気を猩紅熱と区別して、次のように述べている。<sup>(12)</sup>

この時流行した病気の一つは咽頭炎に発疹を伴うおそらく猩紅熱と思われるもので、死亡することは稀であつた。他の一つは風邪の症状が始まって次第にのどから肺に広がり、呼吸困難が増強して窒息して死亡した。回復する者は少数であつた。ある者は信じられない程多量ものを喀出した。私はある患者が咳とともに長さ数インチ、直径一インチ程の白い粘稠な偽膜を吐いたのを見た。

もちろんこれは気管の内面をおおっていた偽膜であり、ジフテリア以外のものではあり得ない。イギリスでもジフテリアに関する記録が十七世紀から散見されることは前に述べたが、十八世紀にはこの国の臨床医

学はさらに進歩し、フォザーギル John Fothergill は一七四八年に“An Account of the Sore Throat Attended with Ulcers”<sup>(13)</sup> というモノグラフを書いた。これはジフテリアに関する先駆的な専門書である。これにはこの病気がアメリカの植民地や西インド諸島で流行しているという情報についても触れており、また咽頭ジフテリアと喉頭ジフテリアを統一的にとらえている。さらにこの病気の原因として化膿性の病毒が患者の呼吸によって伝染するのだらうという卓見を述べている。

また同じくイギリスのハクサム John Huxham は一七五七年に出した“An Essay on Fevers”の第二版でこの病気について記述しているが、<sup>(14)</sup> この病気の前に発疹が出現することもあり、後に発疹が出現することであると述べており、猩紅熱と混同しているようである。

アメリカのバード Samuel Bard は一七七一年に“An Enquiry into the Nature, Cause and Cure of the Angina Suffocativa or Sore Throat Distemper”<sup>(15)</sup> という著書を書き、多数の臨床所見、剖検所見を検討し、鼻咽頭ジフテリア、喉頭ジフテリア及び皮膚ジフテリアを統一的にとらえている。これはフランス語にも訳されて、後にブレトノー Bretonneau にも影響を与えた。

またイギリスのチェーン John Cheyne (チェーン・ストークス呼吸で知られる) は一八〇一年に弱冠二五歳で小児科叢書の一冊として“An Essay on Cynanche Trachealis or Croup”<sup>(16)</sup> を書いている。これはクループ(喉頭ジフテリア)に関する簡単な文献的考察とともに、自験例を剖検所見を含めて検討しているが、彼はクループを咽頭ジフテリアと別疾患と考えていた。この点でフォザーギル Fothergill やバード Bard の見解より後退しているように思われる。チェーン Cheyne はこれらの英米人の著作を読んではないようであり、ドイツのシカエリス Chris. Frider. Michaelis の“De Angina Polyposa sive Membranacea” (1778) が最善であるといつて、これから多く引用している。

### (三) 中国近世前期

中国では西洋のように流行の年次を記録したものは少ないが、多くの医書にジフテリアと思われる疾病の記述がある。中国は近世明清の時代になると医学の各科が専門分化し、喉科医も出現し、また後述のように喉科専門書も多数著わされた。

十六世紀の前半に虞搏によって著わされた『医学正伝』は医学全書であるが、これの卷之二、瘟疫(17)の所には大頭病や蝦蟆瘰の名前でジフテリアと思われる疾病についての記述がある。大頭天行病については前回、金の李東垣の記述を紹介した。『医学正伝』ではまた卷之五、喉病(18)で次のような記述(要約)をしているのはジフテリアのことと思われる。

喉痺多くは痰に属す、重きは宜しく吐法を用うべし、纏喉風は痰熱に属す、また宜しくこれを吐かすべし、喉舌の疾皆火熱に属す、数種の名ありと雖も、軽重の異なり、乃ち火の微なると甚しきとの故なり、微にして軽きは以て緩治し、甚しくして急なるは惟砭針(19)を用いて刺血するを最も上策となす。

次に十六世紀後半または十七世紀前半作と思われる『尤氏喉症指南』という喉科専門書がある。このうち喉痺、鎖喉風、白纏喉風などはジフテリアと考えて間違いないと思われるが、鎖喉風について引用する。<sup>19)</sup>

#### 鎖喉風

熱毒積聚するにより痰涎粘稠となり、会厭を阻塞し、喘急上気し、外頸腫脹す、開闔豁痰を用いて治すべし、外腫れず内痰無き者は名づけて内鎖喉という、不治。

内鎖喉というのはフランスの Bailou が述べていたように、咳も痰もなく気管が閉塞して死ぬ病型で、最も危険である。

次に明末十七世紀前半に『外科正宗』という医書がある。外科の中に咽喉科も含まれていたのであるが、その卷之五から咽喉治験例を引用する。<sup>20)</sup>

## 咽喉治験

一男子素火酒を飲む、一時咽喉腫れ閉じ、口嚙り舌強ばり、痰涎壅塞し、勢頗る危急、針を用い先ず少商二穴を刺し、口嚙方に開く、桐油餞鷄翎を以て稠い痰数碗を吐かせ、語声方に出る。

この桐油餞鷄翎というのは硬い鷄の羽に油をつけて、のどを刺激して痰(偽膜)を吐かせる方法であるが、その説明をさらに左に引用する。

### 桐油餞

喉風、喉閉を治する、其の症先ず両日胸隔氣急、呼吸短促、驀然咽喉腫れ痛み、手足厥冷し、氣閉じ通じず、頃刻にして不治。先ず温湯半碗を用い、桐油三四匙を加え入れて攪勻し、硬鷄翎蘸油を用いて喉中に探り入れ、四五次其の痰壅するを連なり探りて出し、再び探り再び吐かず、人蘇醒して声高くなるを度と為す。

まことに懇切丁寧な記述であり、同じ頃の西洋と比べても中国の臨床医学は進んでいたのではないかと思われる。

さらに十七世紀後半清代初期にも『尤氏喉科秘書』という専門書があり、これは前に引用した尤氏と同じ家系かと思われるが確かめられない。その纏喉風の部分を次に引用する。<sup>(21)</sup>

### 纏喉風

心中躁急によりて発す、先ず二日必ず胸隔の氣緊り、出氣短促し、然して咽喉腫れ痛み、手足厥冷し、頸は絞り転ずるが如く、熱は内に結し、腫れは外に繞る、且つ麻し且つ痒し、喉内に紅糸纏繞し、手指は紅白色、手心は壯熱し、喉腫れて大風痰壅盛し、鋸を曳く声の如し、是れ其の候也。最も忌症と為す。初起一日治すべし。もし一日夜を過ぎ、目直視し、喉間雷声の如き者は不治。

歴世の喉科の専家の喉頭ジフテリアに関する完全な記述のように思われる。

#### (四) 中国近世後期

十八世紀の中国は乾隆時代（一七三六—一七九六年）を中心とした文化の一つの極盛期であり、医学の理論も臨床医学もまた一段と進展した。

喉科に関しては乾隆代には張宗良の『喉科指掌』という専門書がある。これは喉科（咽喉科）の各疾患を絵入りで説明しているユニークな本で、我々もイメージをつかみ易い。例えば第四喉風門では十二症を図説しているが、そのうち纏喉風の説明は<sup>(22)</sup>

纏喉風は肺が時邪に感じ、風痰上壅し、陰陽閉じ結し、内外通じざるに因る。関下壅塞し、甚しきは角弓反張し、牙箝緊閉す。

このように窒息の症状も具体的に述べている。肺が時邪に感じというのは、感染症と考えているのである。

また乾隆代には三代にわたって喉科を専門とし「南園喉科」と称された鄭氏があり、その鄭梅澗は『重樓玉鑰』という専門書を著わし、次のようなことを述べている。<sup>(23)</sup>ここでは伝染という言葉を使っている。

喉間に白腐一症起こるや、其の害甚だ速し、小兒尤も甚だし、且つ伝染多し、一たび誤治を経れば救わざるに至る。此の症肺腎に発す、経治の法肺腎に外ならず、すべて養陰清肺を要し、兼ねて辛涼し散ずるを主とす。

小児に伝染が多いのは小児には免疫がないからである。ジフテリアの弥漫地域では大人はいつのまにか感染して免疫ができていたのである。梅澗は乾隆四〇年（一七七五年）頃からこの病気が流行するようになったと述べている。

なお中国では疫病の年次を記した記録が少ないと書いたが、乾隆年間に流行した「疫疹」を経験した一医師がこれを研究して書いた『疫疹一得』<sup>(24)</sup>という貴重な医書がある。「疫疹」とはあまり見ない病名で、これが何なのかが問題である。

『疫疹一得』によれば、乾隆三三年（一七六八年）に著者（余霖）の住む地方に疫疹が流行し、一人が病を得れば一家に伝染し、軽い場合でも十人中一—二人が死亡し、重い場合は十人中八—九人が死亡したという。その症状は高熱、胃腸



症状、全身紅斑、咽喉頭炎等があり、傷寒に似ているが傷寒ではないと著者は言う。傷寒には発疹がないからというのが主な理由である。

詳細は略すが『中国医学百科全書、医学史』<sup>(25)</sup>ではこれを猩紅熱の流行としている。しかし猩紅熱にしては死亡率が高過ぎる。猩紅熱に合致する所もあるが、昏悶無声、臉上燎泡、大頭、頸腫、鼻衄湧泉等の症状は鼻咽頭ジフテリアの悪性型の合併を思わせる。

前に述べたニューイングランドでの流行、またハクサム Huxham の記載例、また次の世紀でフランスのブレトノー Bretonneau が詳細に研究した場合でも、いずれも猩紅熱とジフテリアの同時流行であった。この「疫疹」もそういう混合流行と考えるのが妥当と私は考えるが、なお後考を待つ。猩紅熱の菌もジフテリアの菌も昔は常在菌のように存在し、両者とも咽喉頭を侵すので、一方が流行すれば他方は日和見感染として同時に流行する可能性は大いにあると思われる。

次に乾隆末期に呉鞠通の『温病条弁』という著作がある。温病とは傷寒以外の熱病をいうというのが建前であるが、実際には温病と傷寒は重なり合っていると思われる。温病学は熱病に対して『傷寒論』とは異なる新しい見方をしたと考えるべきであろう。

さて『温病条弁』の序文<sup>(26)</sup>によれば、呉鞠通は初め科挙をめざして勉強していたのであるが、父の死を機として医学に志した。その勉学中に甥が温病を病み、喉痺となった。ある外科医は水硼酸をのどに吹き入れたが、喉は遂に閉じた。続いて何人かの他の医者呼んで治療を受けたが、大抵双解散、人參敗毒散の外には出ず、どの医師も温病の治療にはお手上げの状態であり、甥は遂に黄色くなって死んだ、と鞠通は述べている。これは急性の喉頭ジフテリアだったようで、その為の彼の甥は死亡したのであり、医師が皆温病の治療を知らなかったということではないと思われる。

それはともかくとして『温病条弁』巻一、上焦篇<sup>(27)</sup>の次の文章は咽喉頭及び喉頭ジフテリアについての記述と考えてよい

であろう。

温毒は咽痛み、喉腫れ、耳の前耳の後腫れ、頬腫れ、面正に赤し。或は喉痛まず、但し外腫れ、甚だしければ則ち耳聾す。俗に大頭温、蝦蟆温と名づくる者にて、普濟消毒飲去柴胡升麻これを主る。初起一二日、再び苓連を去り、三四日これを加うるを佳とす。温毒は穢濁なり。咽痛は経に謂えり。一陰一陽結す、これを喉痺と謂う」と。蓋し少陰少陽の脉皆喉嚨を循り、少陰君火を主り、少陽相火を主る、相濟して災を為すなり。

ジフテリアでは耳下腺炎や中耳炎を併発することが多かったので、このような症状を呈したのである。また「温毒は穢濁なり」といつているのも伝染性の病毒と考えていたと思われる。こういう考え方は前にも述べたように金元の時代からあったのであるが、特に明末の呉有性の『温疫論』の影響が大きい。

##### (五) 日本近世前期

近世前期を十六世紀と十七世紀とすると、わが国では戦国時代から江戸時代前期となる。戦国時代に甲斐の妙法寺が『妙法寺記』という編年式の記録を残している。その中に次のような注目すべき部分がある。<sup>28)</sup>

永正八年(一五二一年)コノ年正月、浮世ニ口痺流行、人民死ヌコト限り無シ、然ル間彼ノ口痺ノ鳥ヲ作り送ル、一日病ンデ頓死ス。

「口痺ノ鳥ヲ作り送ル」というのは意味がわからないが、何か呪い事でもしたのであるか。富士川は『日本医学史』でこれを引用し「口痺は喉痺ナラン、即チ扁桃腺炎ヲ指シテ言フナリ」と述べているが、<sup>29)</sup>一日で頓死するというのは単なる扁桃腺炎ではなく、ジフテリアであろう。この時代ではこれ以外には流行の記録は残っていないようであるが、前回にも述べたように喉痺という病名は一般にも知られていたのであり、それ程稀なものではなかったと思われる。ただ甲州で重症のものが流行したので記録に残ったのだろう。

十六世紀の後半、即ち戦国時代から安土桃山時代にかけて曲直瀬道三という名医が出現し、『啓迪集』<sup>(30)</sup>という医学全書を著わした。これは主として元明の医書から道三の見識によつて抜萃したもので、必ずしも自己の経験とは言えないが、喉痺に関しては明の『玉機微義』によつてこれを八種に分けている。そのうち次の二種はジフテリアとして間違いないであろう。

熱咽喉に結して腫れ、外に遶り、且つ腫れ且つ痒く、腫れて大なるを纏喉風と名づく。

暴に発して暴に死する者を走馬喉痺と名づく。

そして「喉痺の本源」として次のように述べている。

経に曰く、一陰一陽結する、これを喉痺と謂う、一陰一陽は手の小陰、手の小陽二火の脉並びに喉に絡み、氣熱すれば内結す、結甚だしければ腫脹す、腫脹甚だしければ痺す、痺甚だしくして通ぜざる時は死す。

すなわち、喉痺というのは様々な咽喉頭炎を含んでいたのだから、その最も重症なのがジフテリアということになる。なお道三が江戸時代の医学に与えた影響は大きい。

次に十七世紀後半即ち江戸時代前期に『病名彙解』という五冊の病名辞典がある。主に漢方用語の病名を中国医書を引用しながら説明しているが、わが国での経験も含まれている。喉痺の項を見るとまず「常ニ云コウヒナリ」と書いてあつて、この時代も俗語でコウヒと言われていたことがわかる。これは戦国時代の妙法寺記からも推察される通りである。この項の説明の一部を次に引用する。

○陰陽別論ニ云フ一陰一陽結ボフルコレヲ喉痺ト云フ、類註ニ云フ痺ハ閉ナリ

○正伝ニ云フモシ夫卒然トシテ腫イタミ水漿入ラズ言語通ゼザルハ死須臾ニアリ誠ニラドロクベシト云ヘリ  
また喉風の項の説明は次の通りである。

○喉痺也、其ノ種類多シトイヘドモスベテコレヲ喉風ト云フナリ

すなわち喉痺も喉風も同じで、咽喉疾患の総称と考えられている。

## (六) 日本近世後期

十八世紀の初め宝永頃より十九世紀の初め文化年間頃までとする。この時代の十八世紀の終りから十九世紀の初めにかけて蘭学が勃興したことも一つの特徴である。

さて十八世紀前半享保年間に『医療羅合』<sup>(32)</sup>という漢方医学書がある。これに次のような項目がある。

### ○喉痺喉風の吹薬

明礬<sup>(33)</sup> 火器<sup>(34)</sup> に入て火の上に置いて其の煮える中へ蓮肉を皮心を去て入れ、煙出やむほど焼き粉にして管にて吹入るなり。喉風にも鍼を立て、葉を吹くなり。

これらは実際やつていた治療のように思われる。いうまでもなく、喉痺喉風の中にはジフテリアも含まれていたであろう。

次に曲直瀬道三原著といわれる『衆方規矩』を取り上げる。これは江戸時代を通じて各地の書肆が次々に増補版を出して、どこまでが道三の著述か判然としないものである。今、寛保三年版<sup>(35)</sup>（一七四三年）と明和六年版<sup>(36)</sup>（一七六九年）を比較して見ると、この間にも大幅な増補がある。これは時代の要請による増補と考えられる。明和六年版には「増補経験之丸散、当時ノ国手専ラ用ヒテ経験アル方ヲアツム」という項があり、その中には「喉痺ヲ療スル吹薬」とか、また次のような記載もある。

○咽喉腫痛ニハ桔梗<sup>(37)</sup> 甘草<sup>(38)</sup> 水煎シ頻ニ服ス○喉痺及ビ喉ノ中熱シ痛ニハ青艾ノ葉ヲ汁ニツイテ喉痺及ビ入ル、一方枯礬雄黄等粉末トシテ喉ノ内ニ吹入ル○纏喉風ニハ生白礬ノ末冷水ニテ二錢調ヘテ下ス、又灯心艸灰ニ焼イテ喉

ノ内ニ吹入ル。

これらはこの頃こういう病気が多かったので、実際によく使われていた治療法を書いたものと思われる。

また寛政元年（一七八九年）には考証学派の多紀安元が『広惠濟急方』を出している。これも実際に必要な救急治療について素人にも利用できるように書いたものである。その中に急喉痺の項がある（<sup>35</sup>）ので、療法は略し、病気の説明だけに引用する。

〔病状〕 暴に咽喉腫れ痛みて閉ぢ塞がり水漿通らず言語ならず、或は牙関嚙急是なり、早く理療せざれば死す。

〔肺絶〕 急に咽喉腫れ塞がり痰喉に在て響き声嘶のごとく面色青惨たるは肺絶なり、至つて危篤なり。

次に享和三年（一八〇三年）の原南陽の『医事小言』<sup>(36)</sup> から一症例を引用する。

一 婦人喉閉腫痛飲食ヲ絶ス、一 医胆礬ヲ吹キ応ゼズ、一 医清胃ノ属ヲ投ズ、凡ソ七日ニ及ンデ治セズ、予小商ヲ刺シテ血ヲ出シ代鍼散ヲ吹キ、桔梗湯ヲ与フ、治セズ、三黄ノ属効無シ、人或ハ纏喉トナス、予其策ニ窮シテ半夏苦酒湯ヲ与フ、応ゼズ、寒熱往来氣力頗ル衰ヘタリ、四隣集テ刀豆ヲ与フ、杏子肉塩藏スルヲ投ズルノ類日々ニ多シ、十二日ニシテ破レ紫血二口ヲ吐ス、此ヨリ常ニ復ス、

一切喉病、小商ヲ刺シ血出レバ則チ良シ、毒深キ者ハ血出ズ、宜シク再ビ合谷ヲ刺スベシ。

この症例は喉痺乃至纏喉風（ジフテリア）と考えてよいようであるが、一命を取りとめた。南陽は喉痺についてさらに次のように説明している。

喉痺ト云フハ咽喉腫痛シ水飲ヲ絶ス、コレヲ刺シテ黒血ヲ去レバ則チ通ズ、俄ニ腫ルルヲ急喉風ト云フ、其治方ハ血ヲ去レバ皆治ス、故ニ吹薬モ皆胆礬巴膏ノ類ニテ破リテ妙ナリ、刀豆ヲ生食スルハ嘔スル張合吹功ノ術ナリ。

針を刺すのは偽膜を破つてこれを吐出させる為であり、中国より伝来の方法である。また杏子肉、刀豆等で嘔吐を催させるのも同じ目的である。南陽の記述では近隣の人もこの治療に協力している。

次に蘭方医学の本であるが、小森玄良がイギリスのブカン William Buchan の一七八〇年の原著を文化十三年（一八一六年）に翻訳出版した『蘭方枢機』を見てみる。その一項に咽喉焮腫即喉風及び悪性焮腫というのがあがあるが、前者は喉頭ジフテリアを、後者は咽頭ジフテリアの悪性のものを指している。その内容を摘録する。

咽喉焮腫即喉風

○咽喉焮腫スル者ハ赤色疼痛シテ飲食下リ難ク、口涎ヲ流シ、脈疾緊也。

巴旦杏肉（扁桃腺）焮腫劇痛シ、口開クコト能ハズ、呼吸困迫、言語出難ク、已ニ含漱劑、刺絡術、引疱膏等ヲ施シテ未ダ寸効ヲ得ザル者ハ速驗方コレヲ主ル、（処方略）

呼吸窒塞スル者ハ急ニ気管穿孔術ヲ施シテコレヲ救フ、コレ外科ノ関スル所也、故ニ贅セズ、

悪性焮腫

○咽喉悪性焮腫ハ咽喉潰瘍也、初証寒熱交々起リ、脈疾ニシテ虚、身体大ニ衰へ、胸膈煩悶、眩暈悪心或ハ嘔吐シ或ハ泄瀉シ、面部腫起シ、眼中赤盈、舌苔白潤、（以下略）

これより先寛政年間にわが国最初の西洋内科書として、宇田川玄随によってオランダのゴルテル Johannes de Gortel の原書から翻訳された『西説内科撰要』<sup>38</sup>にも喉風の名前でジフテリアが紹介されている。これらはもちろんわが国での経験ではないが、この病気についての認識の歴史として触れておく。

文化年間刊の『方輿輓』で有持桂里はこの病気について次のように述べている。<sup>39</sup>

往年咽喉ノ病、天下一般ニ流行セシコトアリ、其症熱毒酷ニシテ、一二日ノ間ニ噤白く膨脹、或ハ紫黒赤穢色トナル、治ヲ急ニセザレバ二三日ニ命ヲ殞ス、医コレヲ急喉痺ト称シ、又ハ喉癰ト呼び、或ハ纏喉風、或ハ天行猛疽トシ、称呼一ナラス。

富士川はここに述べられているのはジフテリアであるとしているが、江戸時代中頃までの医書にはジフテリアと思わ

れる記述が少ないと、次のように『日本医学史』に書いている。<sup>(40)</sup>

江戸時代初世及び中世ノ頃ノ医書ニハ馬脾風ヲ説カズ、寛政ノ頃ヨリ以後ノ医書ニ始メテ馬脾風ノ事ヲ論ゼルヲ見レバ、コノ症ハ寛政以前ニハ多ク流行セザリシモノカ。

本稿でこれまでに述べて来たことから考えても、江戸時代の前、中期にもこの病気はあつたと思われるが、重症型が流行したことはあまりなかったと思われる。

## ま と め

- (一) ヨーロッパでは十六世紀から種々の病名でジフテリアに関する記録が認められる。十七世紀にはますます広がる傾向があり、アメリカの植民地でもこの病気の流行があつた。また剖検により偽膜形成がこの病気の特徴であることも確かめられていた。
- (二) 一七三五年から翌年にかけて、アメリカ、ニューイングランド地方でこの病気と猩紅熱の同時流行があり、記録が残されている。またヨーロッパでも引き続きこの病気の流行があり、猩紅熱と混同される場合もあり、咽頭ジフテリアと喉頭ジフテリアの異同についても医師により意見を異にした。
- (三) 中国の近世では臨床医学の進歩があり、喉科専門医も出現し、専門書も著わされた。ジフテリアの種々相にそれぞれ病名がつけられ、内服薬のみならず、局所治療に関しても細かく述べられている。
- (四) 中国の近世後期、乾隆時代にはさらに専門分化し、凶入りの『喉科指掌』、また三代続いた喉科の鄭家からは『重樓玉鉞』等の名著も出された。また「疫疹」の流行があり、著書も出されたが、この「疫疹」については私は猩紅熱とジフテリアの同時感染と見るのが妥当と考えている。
- (五) わが国では戦国時代に喉痺の流行の記録があり、これはジフテリアだつたと考えられる。曲直瀬道三は『啓迪集』を

著わして体系的な中国医学をわが国に導入し、その中には咽喉科も含まれており、明代の喉痺の考え方を紹介した。(六) 江戸中期にはいくつかの通俗的な医書及び漢方医書にこの病気の症状と具体的な治療法の記載があり、このような知識が実際に求められていたと思われる。またこの時期に蘭学が導入され、西洋医学におけるこの病気の考え方につき理解が深められた。

これ以後近代の西洋、中国、日本のジフテリアの歴史については次回に述べる。

#### 文献

- (1) Haeser, H.: *Lehrbuch der Geschichte der Medizin*, 484-485, Friedrich Mauke, Jena, 1845.
- (2) Jacobi, A.: *A Treatise on Diphtheria*, 2, William Wood & Co. New York, 1880.
- (3) Cheyne, J.: *An Essay on Cynanche trachealis or Croup*, 13-14, Anthony Finley, Philadelphia, 1813.
- (4) 前掲 (2) 文献、二頁より引用
- (5) 前掲 (1) 文献、四八五頁
- (6) Radbill, S. X., *Pediatrics*, *in* Debuss, A. D. (ed.): *Medicine in Seventeenth Century England*, 261, University of California Press, Berkeley, 1974.
- (7) 前掲 (2) 文献、三頁
- (8) Caulfield, E.: *The Throat Distemper of 1735-1740*, 100-101, *Yale Journal of Biology & Medicine*, New Haven, 1939.
- (9) 前掲 (8) 文献、三九頁
- (10) 前掲 (8) 文献、一〇一—一四頁
- (11) 前掲 (8) 文献、四九頁
- (12) 前掲 (2) 文献、五一七頁



- (13) Talbot, J. H.: A Biographical History of Medicine, 250-251, Grune & Stratton, New York, 1970.
- (14) 前掲(13) 文獻、二〇五—二〇六頁
- (15) 前掲(13) 文獻、三五五頁
- (16) 前掲(3) 文獻
- (17) 虞搏『医学正伝』卷之二、五五—五八頁、人民衛生出版社、北京、一九八一年
- (18) 前掲(17) 文獻、卷之五、二四〇—二四一頁
- (19) 尤仲仁『尤氏喉症指南』七頁、中医古籍出版社、北京、一九九一年
- (20) 陳実功『外科正宗』卷之五、一二三—一二六頁、天津科學技術出版社、天津、一九九三年
- (21) 尤乘『尤氏喉科秘書』五一—六頁、北京市中國書店、北京、一九八五年
- (22) 張宗良『喉科指掌』卷之四、二八頁、人民衛生出版社、北京、一九八九年
- (23) 『中医学解難』医史分冊、一四二頁、天津科學技術出版社、天津、一九八六年
- (24) 余霖『疫疹一得』江蘇科學技術出版社、南京、一九八五年
- (25) 『中国医学百科全书』「医学史」四二二頁、上海科學技術出版社、上海、一九八七年
- (26) 吳鞠通『温病条弁』一頁、中國書店、北京、一九九四年
- (27) (26) と同書、卷之一、二五—二六頁
- (28) 『古事類苑』方技部、一一七八頁、吉川弘文館、東京、昭和五二年
- (29) 富士川游『日本医学史』一七一頁、形成社、東京、昭和四九年
- (30) 曲直瀬道三『啓迪集』卷之五、六十四—六十八頁、古典鍼灸研究会出版部、東京、昭和四七年
- (31) 桂州甫『病名彙解』卷之五、卅一—卅二頁、貞享三年、植村藤右衛門
- (32) 藤井見隆『医療羅合』卷之五、卅二—卅三頁、享保、靈著軒
- (33) 曲直瀬道三『衆方規矩』燎原書店、東京、一九八〇年
- (34) 『医療衆方規矩大成』四三三—四八六頁、名著出版、東京、昭和五四年

- (35) 多紀安元『広惠濟急方』中卷、二十五オ―二十九オ、躋寿館、江戸、寛政元年
- (36) 原南陽『叢桂亭医事小言』卷之四、七十六オ―七十九ウ、須原屋、享和三年
- (37) 小森玄良『蘭方枢機』卷之二、十五オ―十八ウ、須原屋、文化十四年
- (38) 宇田川玄随『西説内科撰要』卷之八、二十四オ―三十四ウ、資料影印叢書、洋学篇9 宇田川玄随集1、早稲田大学出版部、東京、一九九五年
- (39) (29) と同書、七五六頁
- (40) (29) と同書、七五五頁

(七沢リハビリテーション病院)

# A Historical Survey of Diphtheria in the Western World, China and Japan

## Part II : Modern Age (from Sixteenth Century to the Beginning of Nineteenth Century)

by Akira NAKAMURA

In Europe and North America, literatures on diphtheritic diseases was increasing from sixteenth to eighteenth century. In New England of North America, diphtheria and scarlet fever occurred epidemically in mingled form from 1735 to the succeeding year. Thereafter, many physicians in Europe and America treated patients of diphtheria and had different opinions about the nature of croup and diphtheria.

In China, its own clinical medicine progressed extraordinarily during the modern age. Laryngeal specialists appeared and wrote special monographs about the pharynx and larynx. A physician wrote about “epidemic exanthem”, which the author presumes to be a complicated form of scarlet fever and diphtheria.

In Japan, diphtheria occurred in sporadic form usually, and in epidemic form occasionally. Japanese physicians studied medicine from China since the ancient age, and also introduced European medicine through the Netherlands in the eighteenth century. So Japanese physicians learned knowledge about throat diseases and diphtheria from Chinese and European medicine.